

◁1997年度会長挨拶▷

平成9・10年度
日本放射光学会の基本方針日本放射光学会会長
上坪 宏道

私はこの度、富家雄前会長の後を受けて、平成9年1月から平成10年12月までの任期中に会長に選任されました。このような重責を学会員の方々の期待に添えるように果たせるか、いささか心許さないのですが、できるだけ努力をすることによって引き受けさせて戴きます。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

放射光学会はこの4月で設立9周年を迎えます。放射光の利用は年々発展しており、基礎科学の広い分野の研究や基盤技術の開発に使われるようになってきました。この間に会員数も1000名を超え、放射光学会年会も引き続き「放射光科学合同シンポジウム」の形で実施されることが決まるなど、本学会の重要性がますます高まっています。これはひとえに歴代会長と幹事の方々のご努力のおかげですが、これを支える会員の皆様の努力の賜物でもあります。平成9・10年度の日本放射光学会の基本方針も従来の行き方を踏襲して、「わが国における放射光利用研究の成長が放射光学会の発展につながり、放射光学会の活動が放射光利用研究の新しい展開をもたらす」というような役割を本学会が果たすように努めたいと思っています。

最近わが国では新しい放射光施設が相次いで建設されています。立命館大学のAURORAはすでに稼働しており、SPring-8、HISORも今年中には運転が始まる予定です。また、PFの低エミッタンス化・高輝度化も近く完成し、わが国における放射光利用研究の環境は格段に整備されます。したがって、これからはこれらの施設を使って如何に優れた成果を出すかが問われることとなります。そこで本学会の重要な活動として、様々な研究分野のユーザーが交流し協力する場をつくることをあげたいと思います。

アジアでは中国で第2世代の2施設、台湾、韓国で第3世代放射光源が稼働しており、上海では第3世代の施設建設計画が進められています。さらにタイ国でも石井武比古教授の協力で放射光施設の建設が進み、インドでもインドールで放射光施設が建設されていて、アジア各国での放射光利用研究は急速に発展する気配を見せています。ただ、アジア諸国の悩みはユーザーの不足と若い研究者をどう養成するかで、国際協力の必要性が指摘されてい

ます。今期の本学会の活動に是非アジア各国との協力を加えたいと思っています。

本学会の会員を増やし財政的基盤を強化することは、学会の活動を活発にする基本的な条件です。この点に関しても微力を尽くして努力したいと思っています。学会員のご協力をお願いいたします。

一口メモ

梅

バラ科さくら属の落葉性高木であり実を薬用とするため、古代中国から渡来したといわれ、水戸の偕楽園を初めとする各地の日本庭園で、松、竹と並んで代表的な樹木の一つとなっている。青梅は青酸（アミグダリン）を含むので、たくさん食べると中毒になるが、梅干や梅酒として多くの人に親しまれている。

花は五弁で香りが高く、色は白、紅、薄紅があり、一重咲きや八重咲きがある。その花は初春の季語となっており、春を呼ぶ花として古くから日本人に親しまれている。冬から春によく見かける野鳥のメジロが好んで蜜を吸っている姿をよく見かける。

(K. Ohshima)

